

# 観測部月報

★

東亞天文協會

## ★ 流星課だより (105).

課長 小楨孝二郎

八月は、一年中で、最も流星の多い月である。スコトランドの農民が“聖ローレンスの涙”と唱へたペルセウス大流星雨は八月初から中旬に互つて活動する。極大は、本年では上弦が10日にある爲、絶好とは云へぬかも知れぬが、夜半後、月落ちての観測から、出現状態を充分知り得られるであらう。近畿や瀬戸内を中心に観測網を張り、下記のプログラムで観測をしたいので、課員は申すまでもなく、一般会員の参加を願ひたい。

5日—12日            0時—3時

13日—15日          2時—3時半

八月末に活動する駈者座の流星群は、本年は丁度新月に際會する爲、観測に好都合である。この流星群は、デニングによつて、久しい以前から指摘された流星群であつて、速度の速かなる點と、痕を残すことを特徴としてゐる。最近1935年八月31日にブライグ及ゾンネベルグ(獨)で見られた時は、一時間20個にも達した由。輻射點は $\alpha=86^\circ$ 、 $\delta=40^\circ.5$ (駈者座附近)を示してゐた。Guth氏は其の軌道を研べて、これが Kiess の發見した1911年第2彗星と關聯するものであるとした。

以上の二流星群の外、上旬には前月末よりつゞく水瓶座  $\delta$  流星群も見え、中旬にかけてカシオペヤ、白鳥、セフェ、魚座等から放射する流星も見られる。

×            ×            ×            ×            ×

去る五月26日23時40分自分は蝸座流星群に屬する大流星(負3等以上)を龍座に見た。他の地方に於て見られた方の御報告を望む。(1940年6月3日記)

## ★ 太陽課

報告者16名、そのうち新報告者は

前橋榮太郎君	25mm 反射	× 54	大阪市明星商業
江川 義君	30mm 屈折	× 50	千葉縣柏町
和歌山高商天文同好會	203 mm 反射	× 136	

上記三君を御紹介します。何とぞ御永續下さい。20日以上のお観測を遂行下さ

太陽黑點相對數報告 (1940年5月)

觀測者 (觀測地)	坂上	津留	本田	岡林	和歌山	谷口	前橋	竹内	木邊	正村	大石	沓掛	堀田	阿部	國分	小石	富田	江川
口徑 mm	42	130	75	75	203	40	25	32	75	25	55	102	20	28	100	58	40	30
倍率	64	48	60	60	136	50	54	50	60	48	64	75	50	45	45	64	32	50
方法	投	投	直	投	直	直	直	直	直	直	直	直	直投	投	投	直	直	直
1		22	34	25		13	16	缺	41		23	45		53	26	23	缺	
2		26	24	23		12	14	缺	13		23	27		缺	15	29	23	〃
3		38	38	11		12	14	缺	13		27	24		38	29	11	〃	〃
4		〃	雨	雨		〃	〃	〃	〃		26	〃		39	37	〃	〃	〃
5		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		18	15		〃	〃	〃	〃	〃
6		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		18	19		〃	〃	〃	〃	〃
7		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		20	19		24	34	18	23	〃
8		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		17	19		22	23	19	〃	〃
9		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		27	16		〃	28	〃	〃	〃
10		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		41	43		44	47	39	62	〃
11		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		37	44		49	28	38	54	13
12		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		35	30	22	31	36	32	39	43
13		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		27	〃		〃	〃	〃	〃	〃
14		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		49	〃		97	74	68	〃	〃
15		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		〃	95		104	69	61	59	75
16		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		〃	〃		109	78	76	65	〃
17		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃
18		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		72	〃		88	58	〃	〃	〃
19		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		〃	〃		96	89	68	56	〃
20		〃	〃	〃	65	63	17	60	〃		〃	〃		76	85	62	82	51
21		75	83	70	72	83	49	58	〃		79	80		108	89	60	85	71
22		86	90	58	86	97	32	缺	〃		58	〃	68	79	87	56	91	71
23		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		65	76		96	82	80	87	80
24		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃
25		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃
26		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		57	79		56	64	52	76	54
27		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		65	80		75	72	70	80	55
28		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		〃	〃		49	33	〃	84	〃
29		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		59	66		68	〃	〃	70	〃
30		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		79	89		74	49	39	63	〃
31		〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃		〃	58		缺	23	缺	〃	〃
觀測日數		8	25	19	8	15	18	7	19		20	20	3	22	24	17	19	15
一日平均		54	65	47		52	28	60	50		43	52		67	52	47	63	56
前月平均		70	79	50		54		39	71	57	54	66		77	59	59	78	

訂正：天界229號3月分報告中，津留氏 27日分 111 を 114 と訂正します。

つた方が5名もありましたが、不幸にして、24、25の両日が雨の爲め缺測になりました。概況を申しますと、上旬は非常に淋しい太陽面で、神戸の谷口氏は5、6、9日を0と報告されます位で、殊に南半球に1群の黒點も認め得ない日が1週間もつぎました。中旬以後は稍々勢力を取りもどし、賑やかになりました。今月は新群19群を認め、北半球8群、南半球11群で、そのうち東端より出現せるもの8群、途中突發せる群は北7、南4の11群で、又途中消滅の群は北2、南2の4群であつた。高緯度群としては23日經度 $42^{\circ}$ 、緯度 $+24^{\circ}$ に突發した群が一番高緯度でした。沓掛、津留、阿部氏より緯度報告、南北半球別相對數を富田氏より、又、阿部氏よりは南北相對數、一日平均値、半影を存する黒點總計、1群中に含まる黒點數平均等の御報告をいたゞいてゐる。

次に經緯度觀測者の爲め必要な數値を示します。

O <sup>h</sup> U. T.	P <sub>o</sub>	B <sub>o</sub>	L <sub>o</sub>
7月 1日	-2.75	+2.95	297.51
5	0.92	3.38	244.57
10	+1.35	3.90	178.40
17	4.48	4.59	85.76
22	5.04	6.66	19.61
31	5.76	10.42	260.55
8 7	13.16	6.24	167.99
14	15.67	6.63	75.44
21	+18.00	+6.93	342.92
28	20.07	7.13	250.43

★ 黃道光課より 静岡縣の醍醐 正氏から四月7、9、10、30、五月1、5、18日の各日に於ける夕刻の觀測報告を受入れた。五月18日を除き、皆黃道帯が美しく現はれ、又、對日照も、四月10日、五月1日、同5日には立派に見られてゐる。しかし時々には月や金星や銀河のために困難があつたらしい。

前にも述べた通り、今年は、西天夕刻の觀測時期に金星が宵の天にあり、七月から以後は、又、東天早曉の觀測期に、金星があるので、全年、金星に妨げられ、甚だ都合が悪い。來年(1941年)も、前半年の西天は木星と土星とに妨げられるが、七月以後は此のやうな妨害は無いから、其の時には全世界を擧げて觀測を獎勵しなければならぬ。

去三月24日前後には全世界の無線界の大異變と共に、スバラシイ北極光が歐米では見えた由。我が日本でも、樺太、北海道、滿洲あたりでオロロラが見えなかつたらうか？ 太陽觀測をしてゐる人々は時々此の種の注意をして貰ひたい。(山本)

★ 變星課 今月の報告者、下記の通り。但し、津留、山田兩氏は4~5月分、1939年後半期の變星整理完了、次號より發表の筈。(岡林)

氏名	1940年5月					
	第一部		第二部		計	
	星數	目測數	星數	目測數	星數	目測數
岡林 滋 樹	8	28	8	42	16	70
香掛 七 二	1	1	4	8	5	9
津留 繁 雄	5	17			5	17
山田 達 雄	4	6			4	6

#### 本誌前號(第230號)の表紙口繪について

本誌の六月號(第230號)の表紙第1頁に“蟹星霧”のカットを出した。之れは神戸の本會員林仲太郎氏の特別な御厚意によるもので、同氏所有の O. M. Mitchell 著書“The Orbs of Heaven, or, The Planetary and Stellar Worlds. A popular exposition of the great discoveries and theories of modern astronomy”の第4版(英京 Ingram-Cook 社出版)1853年(日本の嘉永6年)發行の書物の中に出てゐるものである。

“蟹星霧”の此のスケチを畫いた第三代ロス卿(William Parsons)は、英國アイルランドの貴族で、政治界に雄飛する一方、天文學に興味を有ち、キリヤム・ハッシュルの後を受けて、自ら反射鏡の製作法を苦心研究し、遂に1845年、三ヶ年を費した口径6呎の大反射鏡が出来上つたので、之れを用ひて、1848年から晩年(1867年死)に至るまで、夥しい星霧の精密な觀察をやり遂げた。“何しろ、天文學に寫眞術の應用せられる以前のことであるから、甚だ粗雑なもので、後年、寫眞術がデビューしてからは、ロス卿の眼視觀察スケチの如きは價値が無い”と思つてゐるモダン・ボイなどが世には多いけれど、實は誤りで、現に此のスケチと、本誌第226號の表紙第2頁の口繪寫眞とを注意深く見て頂くと、判明する通り。今日では未だ未だ寫眞術では到底及ばないものが眼視觀測には澤山ある。星霧の構造は、現に此の通り、其の他、遊星面の模様も觀察でも、彗星の光輝の分布にしても、黃道光の觀測などにしても、今日、寫眞は全く落第で、熟練な眼視觀察の獨壇場である。

本誌第230號のカットが、誤つて上下轉倒してゐるのは、全く校正の誤りである。御わびします。第226號の寫眞と比べて貰へば、萬事は明瞭です。

(編輯)